

〔研究ノート〕

笠置を描く中世絵画

中世の笠置寺を描く絵画といえば、よく知られているのは13世紀に制作された「笠置曼荼羅図」(当館蔵)【図1】でしょう。

二人連れの参詣人と、弥勒如来の石像を仰ぎ見る僧侶のほかには人影はありません。小鳥も飛ばず、風もない静かな風景です。弥勒像本体をみれば、衣を通して感じられる腿の張り、蓮台を強く踏みしめる足の指、そして、参詣人を見守るようなまなざしに、なまなましい迫真性があります。

この弥勒像は、笠置寺に今も残る、巨岩に線刻された虚空蔵菩薩像と同様に、岩面に線刻されていたものですが、この絵ではあたかも高浮き彫りのように、立体的に描かれています。信心深い参詣人は、線刻像に、このような、いまにも動き出しそうな現実感のある弥勒の姿をイメージしていたのでしょうか(1)。

残念ながら、この像は14世紀の南北朝動乱の戦火にかかります。炎にさらされた岩の表面はもろもろと崩れ落ち、線刻像は消えてしまいます。しかし、その姿は、笠置の人々の心に永遠に刻みつけられていたはず…、と思いたいところですが、その期待はあっさり裏切られます。

たとえば、室町時代に描かれた「笠置寺縁起絵巻」(全三巻、笠置寺蔵)には、天人が笠置の岩に

弥勒像を彫る奇跡の情景【図2】が描かれています。そこにみることのできる像の姿は、「笠置曼荼羅図」とは全く違います【図3】。

私は、この絵巻は天文7年(1538)ごろに、笠置寺で作られたと推測しています。それは、絵巻の詞書の筆跡が、それ以前に作られていた縁起を天文7年に書写した「笠置寺縁起」(一冊、笠置寺蔵、以下天文縁起と仮称します)(2)の筆跡に酷似しているからです。絵巻の詞書は、天文縁起の内容に準じ、全巻一筆で書かれています【図4】。絵の上に詞の文字列が重なることもあり、絵と詞書が同時に制作されたものであることも明白です。その筆跡を天文縁起の筆跡【図5】と見比べれば、詰まった字配りや、のつなげ方、「天武」の払いなど、同一人の筆かと思え、天文縁起の書写事業と絵巻制作が同時期に進められたとわかります。

寺の由緒や歴史を綴る縁起が書冊の形に整えられたり、絵を加えて縁起絵巻が作られたりする背景には、寺の復興のために資財を集める勸進活動がありました。室町時代の笠置寺では文明14年(1482)ごろに勸進沙門貞盛が中心となり勸進活動が活発化しました。そのときの「笠置寺再興勸進帳」が笠置寺に現存しています。また、天文

縁起の原本となった縁起もこのときに作られたものですが、こちらは失われています。

しかし、寺の復興は思うように進捗せず、天文7年になって、新たに縁起を書写するとともに絵巻制作も企てられ、「笠置寺縁起絵巻」が成ったのでしょう。この絵巻は、後醍醐天皇のために善戦した笠置の衆徒が、恩賞として戦乱で荒廃した笠置寺の復興を約束されたところで終わっています。つまり、復興の正当性を訴える絵巻で、まさに勸進のために作られたと考えられるものです。

絵巻制作にあたって、焼失前の弥勒像をどのように描くのかは、大きな問題となっていたでしょう。ここであらためて気づくことは、「笠置曼荼羅図」の記憶も、16世紀の笠置には無かったということです。知っていれば絵巻制作時に参照されたでしょう。

そして、ほんとうに意外に思われるのですが、そもそも「笠置曼荼羅図」が、笠置寺の弥勒像を描く絵画であるということ自体、きれいさっぱり忘れられていたのです。13世紀に描かれた「笠置曼荼羅図」が、歴史の闇からふたたび姿を現すのは19世紀初めのことです。文化4年(1807)に、安藤対馬守がこの絵の鑑定を住吉家に依頼していますが、その時には多武峰談山神社の十三重塔と釈迦を描いた絵と認識されていました。これが笠置寺とその弥勒像を描いたものと訂正される

のは20世紀になってからです(3)。

このように、「笠置曼荼羅図」と「笠置寺縁起絵巻」は、それぞれ中世の笠置の風景を描く絵画であるとともに、幾重にも人の記憶のはかなさとよりなさを感じさせる絵画でもあるのです。(泉万里)
※図2、3、4は『南山城の古寺巡礼』京都国立博物館 2014年、図5は注(2)小林義亮氏編「笠置寺保存資料」より複写致しました。

- (1) 加須屋誠「笠置寺曼荼羅図小論」中野玄三他編『方法としての仏教文化史』勉誠出版、2008年。
- (2) 「天文縁起」は、小林義亮氏によるウェブページ「笠置寺資料集」<http://kasagidera.la.coccan.jp/index.html>の「笠置寺保存資料」参照(2017年11月8日閲覧)。中山一麿「天文七年写『笠置寺縁起』翻刻・校訂」荒木浩編『科学研究費補助金基盤研究(B)17320039研究報告書(平成18年度)小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』、2007年。小林義亮『笠置寺激動の1300年 ある山寺の歴史』文芸社、2004年初版2刷。
- (3) 矢代幸雄「笠置曼荼羅」『大和文華』2、1951年。

図5 天文縁起(部分)



図4 「笠置寺縁起絵巻」上巻第2段詞書



図3 同左(部分)



図2 「笠置寺縁起絵巻」(笠置寺蔵)上巻第2段

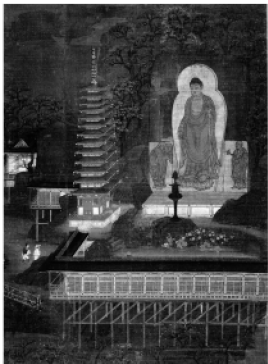


図1 笠置曼荼羅図